

色と光

——太陽の比喩についての小論

太田 和則

はじめに

プラトンは、『国家』VI 巻の太陽の比喩(506d6-509b10)において¹、可知界における<善>の役割を、可視界における太陽の役割になぞらえて、次のように説明している。もし人が視覚能力の備わった目を持っていて、事物に色がついているとしても、その場に光がないとしたら、見ることも見られることも成立しない。その光を生み出す原因は太陽であり、見る人の視覚能力も、太陽に起因する²。太陽は視覚能力とは異なるものだが、視覚能力によって捉えることができる。そして、「思惟によって知られる世界において、<善>が<知るもの>と<知られるもの>に対してもつ関係は、見られる世界において、太陽が<見るもの>と<見られるもの>に対してもつ関係とちょうど同じなのだ」(508b13-c2)。つまり、目は日中の明るく照らされたものに向けられるならば、はっきりと見えて、健全な視覚能力が備わっていることが分かるが、夜の暗闇の中のものに向けられるならば、ぼんやりとしか見えず、盲目であるも同然に思われる。ちょうどそのように、魂もまた、<真理>と<ある>(ἀλήθεια τε καὶ τὸ ὄν)に明るく照らされたものに向けられるならば、知性を働かせることができ、知性を持っているとみられるが、暗闇と入り混じったもの、つまり生成消滅するものに向けられるならば、思いなすばかりでぼんやりとしか見えず、知性を持っていないようにみられる。そしてちょうど太陽が可視界に視覚能力と光をもたらすように、可知界に知(認識能力)と真理をもたらすものこそが<善>である。<善>は知によって捉えられるが、それ自体は知や真理とは異なり、そのどちらよりも美しく価値がある。また、太陽が可視界のものに見られる能力をもたらすだけではなく、それを生成させ、成長させ、養い育てる役割も担って

¹ テキストのページ番号は Burnet 版の OCT に準拠。邦訳は基本的に藤沢訳に準拠(ただし、都合により一部改変した)。

² 509b2-3 では、見られるものの見られる能力も、太陽に起因することが示唆されている。

いるように、〈善〉は可知界のものに対して、それが知られると同時に〈ある〉・実在するということ(τὸ εἶναί τε καὶ τὴν οὐσίαν, 509b7-8)ももたらす。そして太陽が可視界において、単なる生成とは同一視できないものであるように、善は可知界において、実在を超える位と力を持っている(ἔτι ἐπέκεινα τῆς οὐσίας πρὸς βίαν καὶ δυνάμει ὑπερέχοντες, 509b9-10)――。

以上の説明を通して、プラトンが読者に次のような構想を伝えようとしていることは確かであろう。つまり、〈善〉は可知界にとって、可視界にとっての太陽のような役割を果たしており、それは可知界のものに対して、あたかも光のように真理を与え、その世界のものの可知性と、〈ある〉・実在するというものの原因になっている。そして〈善〉も可知界の一員であるが、それ自体は実在と同一視できるものではない。

しかしながら、読者がこの構想の内容をどこまで具体的に理解するよう求められているのかは、テキストからは必ずしも明らかではない。太陽の比喩の狙いは、可視界を徹頭徹尾可知界のシンボルとして扱いながら、この構想をとにかく提示するということに、尽きているようにさえ見える³。

可知界における〈善〉の役割についてのプラトンの構想を、今以上に踏み込んで理解するためには、太陽・線分・洞窟の比喩の統一的で徹底的な調査が必要であろう。しかしこの試みに取り組むには、多くの準備作業が必要であると思われるので、別の機会に譲るとする。代わりに私が以下で試みるのは、太陽の比喩そのもののテキストの読解に関して、従来あまり顧みられていない二つの問題点を指摘し、それに対する適切な解答を探ることである。問題点の一つは、可視界の見られるものについて、その「色」ということが言及されているが、この色というものは何を意味するのかということ。もう一つは、太陽や〈善〉がもたらす光や真理は、視覚や知の能力が実現するために、それ自体で十分なのはたらしめるか否かということ。この二つの問題の解決によって、太陽の比喩そのもののテキストに関する理解を独自の視点から深めることが、本稿の考察の目的である。

1. 色とは何か

太陽の比喩において、可視界の色ということが言及されているのは、例えば次の箇所である(507d8-508a3, 以下、便宜上この箇所を【T1】と呼ぶ)

³ 朴, 22-23.

「ところが、視覚とその対象に関わる能力は、そういうもの(第三のもの)を別に必要とするということに、思い当たらないかね？」

「どのように必要とするのでしょうか？」

「目の中にちゃんと視覚があり、それをもつ者が視覚を用いようとつとめても、そして見られるものには色(χρῶας)が現にあるとしても、しかし、本来まさにこの目的のために特別にあるところの第三の種族のものがそこに現在しなければ、君も知っているように、視覚は何ものも見ないだろうし、さまざまな色(τὰ...χρώματα)も見られないままでいるだろう」

「その特別のものと言われるのは、いったい何でしょうか？」と彼は言った。

「君が光と呼んでいるものだ」とぼくは言った。

「それならおっしゃるとおりです」と彼。

「してみると、見る感覚と見られる能力とを結びつけている絆は、他の感覚の場合の結びつきとくらべると、そこにはたらく些細ならざるものの分だけ、一段と貴重なものだということになる——いやしくも光が無価値なつまらぬものではないならばね」

「それはもう」と彼は言った、「どうして無価値なつまらぬものなどと言えましょう」

視覚と見られる能力が、見る・見られるということを実現するために、光という第三のものを必要とすることが述べられるこの箇所において、色とは何を意味するものとして語られているのだろうか。この問題に解釈者の関心が向けられることはほとんどない。しかしながら、以下での私の考察が正しければ、これは【T1】の解釈にとって大きな意義を持つ問題である。

色が何を意味しているのかについては、はっきりとした解釈が述べられることがそもそも少ないが、次のような見方は存在する。それは、色とは見られるもの(τὰ ὁρώμενα)のことだ、という見方である⁴。【T1】において、「見られるものに…現にある」(παρούσης δὲ χρῶας ἐν αὐτοῖς)⁵とされている色が、見られるもの自体を意味するという点は奇妙に思われるかもしれない。しかし色自体も見られるものとして扱われてよいという点については、テキストに基づいて次

⁴ Adam, Vol. 2, 60; Ferguson, 135.

⁵ Adam, Vol. 2, 82-83 に従い、507d12「αὐτοῖς」は「τοῖς ὁρώμενοις」を意味すると解する。文法上は、先行する「目」(ὀμματα)を受けると解するのが最も自然であるが、507e2「さまざまな色も見られないままでいる」や、508c5「白昼の光が表面の色いっばいに広がっているような事物」という記述は、色が見られるものに内在することを強く示唆している(文法的な問題が解消できないとする人々の多くも、テキストの校訂によって、同様の解釈を試みている)。

のような根拠を挙げることができる。第一に、【T1】では「さまざまの色も見られないままでいるだろう」(τά τε χρώματα ἔσται ἀόρατα)として、色自体が視覚の対象でありうることがはっきりと示唆されている。第二に、目下の議論でいう「見られるもの」とは、V 巻終盤の、知識と思いなしを区別する議論で、「多くのもの」(τά πολλά)として語られていたもののことであると考えられるが(cf. 507a7-b11)、V 巻の議論において、「多くのもの」の具体例として挙げられていたのは、特に「美しい声」(τάς…καλὰς φωνάς)や「美しい色」(…χρόας)や「美しい形」(…σχήματα)などであった(476b4-6)。

しかし、太陽の比喻で「見られるもの」という名で呼ばれているものを、一般的に色というその要素と同一視することはできないと思われる。この点を確認するために、太陽が、可視界のものの可視性だけでなくその生成の原因でもあることが述べられている、次の 509b2-4 に目を向けよう。

「ばくの思うには、太陽は、見られる事物に対して、ただその見られるというはたらきを与えるだけではなく、さらに、それらを生成させ、成長させ、養い育むものでもあると、君は言うだろう。…」

見られるものは太陽のはたらきを受けて生成し、成長し、養い育まれる——このことは、「見られるもの」としてここで念頭に置かれているのが、色そのものではなく、色を持つ方の、恐らくは動物や植物といった事物であることを示している。後の線分の比喻においても、可視界の要素として具体的に言及されているのは、動植物や人工物、そしてその影などである(509e1-510a6)。

少なくとも、色は、単なる「見られるもの」ではないのだ。【T1】において、色が実際にどのようなものとして語られているのかに注目しよう、ここでは、視覚と見られる能力が光を必要とするということが、次のようにして確認されている。「目の中にちゃんと視覚があり、それをもつ者が視覚を用いようとつとめても」(Ἐνούσης που ἐν ὀμμασιν ὀψεως καὶ ἐπιχειροῦντος τοῦ ἔχοντος χρῆσθαι αὐτῇ)、「そして見られるものには色が現にあるとしても」、光がなければ、見る・見られるということは実現しない——この議論の流れからは、次の点を読み取ることができる。事物に色があるということは、その事物に、見られる能力が備わっているということを意味するのである。

この点自体は、ごく自然な考え方として理解できるが、色そのものは能力として考えられてはならないという点に、注意する必要がある。太陽の比喻は、先に言及した V 巻の知識と思いなしの議論を、多くの点で踏まえて語られて

いると思われる。その議論の中で、知識と思ひなしはどちらも一種の能力として考えられていた。しかしそこでは、能力は色を持たないとされていたのである。次の 477c6-9 を見てみよう。

「…＜能力＞というものは、ぼくがこの目で見ることのできるような特定の色だとか、形だとか、その他これに類する性質を何ひとつもっていない。他の多くの事物の場合には、そういった性質をそなえているから、ぼくはそれらの性質に直接目を向けさえすれば、ある事物と他の事物とを、ぼく自身の心のなかで区別することができるのだ。…」

能力が色を持たないとすれば、色自体が能力であることも不可能であろう。

色自体は能力でないとすれば、色を持つことはどうして、見られる能力を持つこととして語られることができるのか？——私は、その答えは次の点にあると解釈する。それは、目という器官が、見る者のうちの、視覚能力をまさに担う部分であると同様、色は、見られる事物のうちの、見られる能力をまさに担う部分である、という点だ⁶。

次の点も、この解釈を裏付けているだろう。太陽の光が、視覚と見られる能力に付け加わるということは、その光が目と色に注がれるというイメージを通して語られているのだ。以下の 508b6-7 (この箇所を【T2】と呼ぶ)、および 508c4-7 を見てみよう。

「それにまた、目は自分のもつ能力を、太陽から注ぎこまれるようにしてまかなわれながら、所有しているのではないかね？」

「目というものは」とぼくは言った、「君も知っているように、もはやこれを、白昼の光が表面の色 (τὰς χροάς) いっぱいに広がっているような事物には向けずに、夜の薄明かりに蔽われている事物に向けるときには、ぼんやりとにぶって、盲目に近いような状態となり、純粹の視力を内にもっていないかのようにみえるものだ」

本章の結論は次の通りである。色は、それを持つ事物と同様、それ自体も

⁶ ただし、色が目のように「器官」(τῶν ὀργάνων, 508b3-4) であると解する必要はない。また、視覚と目の結びつきは、見られる能力と色の関係ほど強くはないだろう。と言うのも、視覚障害のことを考えれば (cf. 506c6-9)、目は必ず視覚能力を備えているとは言えないからである。だからこそ、「目の中にちゃんと視覚があり」(507d11) という条件も語られているのであろう。

見られるものであると言えるが、見られる事物の、見られる能力をまさに担う部分であるという意味で、特別なものである。それゆえにこそ【T1】では、色そのものは能力でないにもかかわらず、色を持つことが、見られる能力を持つこととして語られているのである。

2. 光と能力

太陽の比喩の理解にとって重要な意味を持つと思われるにもかかわらず、従来あまり取り上げられていない問題がもう一つある。それは、太陽や<善>がもたらす光や真理は、視覚や知の能力が実現するために、それ自体で十分なのはたらしきをするか否かということである。

まず、次の点を確認しておこう。テキストにおいて、見る能力ということは二つの意味で言われていると考えられる。一つは、①暗闇の中でも目に備わっているような、見ることの実現のために、さらに光を必要とする能力。もう一つは、②光を受けてもたらされるような、見ることの実現のためにそれ以上光を必要としない能力。例えば、【T1】で言われているのは①の能力であり、【T2】で言われているのは②の能力である。また、以下の 508e1-3(この箇所を【T3】と呼ぶ)を見ると、知る能力ということについても①②に相当する区別があり、この箇所でいう「認識能力」は②のような意味で言われていると解することができる。

「それでは、このように、認識される対象には真理性を提供し、認識する主体には認識能力を提供するものこそが、<善>の実相にほかならないのだと、確言してくれたまえ。…」

太陽の比喩において、能力の意味が①②のように区別されているということに注目した解釈者は、J. Adam を除けばほとんどいないと思われる。しかしその Adam は、次のような、いささか不自然にも思われる解釈を提示している。と言うのも Adam によれば、②は、見る・知るということをまさに実現する能力 (power to exercise) であるが、それは実質的に①の意味での能力の実現に他ならないというのである⁷。

Adam の解釈が「不自然にも思われる」と述べた理由は次の通りである。一般的に言って、「δύναμις」というギリシア語によって、能力や力、機能といっ

⁷ Adam, Vol. 2, 58, 60-61.

たことではなく、その実現された状態を意味するということは、自然でないように見える。また、アリストテレスの用語法に目を向けると、②の意味での「δύναμις」は「ἐνέργεια」、つまりいわゆる「可能態」ではなく「現実態」と等しい意味で用いられていることになる。こちらの点については Adam 自身も、彼の解釈が意味する事態の問題に気づいている。しかし Adam によると、その問題の原因は、プラトンの「哲学用語不足」(the want of a strict philosophical nomenclature)にあるという。

ここで Adam がプラトンに向けているような評価は、果たして妥当なものだろうか。例えば Adam は、②が能力でありながら、①の能力の実現ということと事実上区別しがたいと想定している⁸。能力とその実現ということは明確に異なる概念であるようにも思われるので、この想定 of 妥当性に、まずは疑いの目を向けることができる。

しかしここで概念の考察に立ち入るよりも、冒頭に挙げた問題との関連で、むしろ以下の点に注目してみたい。

Adam が明言してはいないものの、彼の解釈は恐らく次の前提に基づいている。それは、太陽や<善>がもたらす光や真理が、視覚や認識能力が実現するために必要であるだけでなく、それ自体で十分なはたらきをするということである。以下に挙げる幾つかの理由から、テキストを読む上で、このような前提を置く必要はないと私は考える。

第一に、テキストにおいて、見る・見られるということが実現する仕組みは、見る・見られる能力と光だけの関係に基づいて語られているわけではない。実際、【T1】で「それ(目)をもつものが視覚を用いようとつとめても」(507d11-12)という条件が言われていることは、見る主体(魂)が見る能力の行使を意図するか否かという点が、この能力の実現を左右するということを示唆している。言い換えれば、十分な視力と光があっても、よく見ようとしなければ見えるものも見えないということを、プラトンは考慮に入れているのである。

第二に、魂の認識能力が、真理(光に喩えられている)に照らされたものに向けられる場合とそうでない場合との違いは、魂の持つ能力が実現されるか否かではなく、十分な能力を持っているか否かという点にあるように思われる。次の 508d4-9 に注目してみよう(この箇所を【T4】と呼ぶ)。

「…魂が、<真>とくある>が照らしているものへと向けられてそこに落着くときには、知が目覚めてそのものを認識し(ἐγνων), その魂は知性をもつ

⁸ Adam, Vol. 2, 60.

ているとみられる。けれども、暗闇と入り混じったもの、すなわち、生成し消滅するものへと向けられるときは、魂は思いなすばかりで(δοξάζει)、さまざまな思いなしを上を下へと転変させるなかで、ぼんやりとしかわからず、こんどは知性をもっていないのと同じようなことになる」

魂を真理に照らされたものに向ける場合、知識を持っていることになり、そうでない場合、ただ思いなしを持つことになる。ここでも、V 巻の知識と思いなしの区別が念頭に置かれていると思われるが、先に述べたようにその区別にあたって、知識と思いなしはどちらも能力と見なされていた。以下の 477d7-e3 を見ることで、改めてそのことを確認しておこう。

「…君は＜知識＞を能力の一種であると言うかね、それとも、何の種族のうちに数えるだろう？」

「能力の、です」と彼は答えた、「しかも、あらゆる能力のうちでも最も力づよい能力として」

「では、＜思いなし＞はどうだろう？能力のうちに入れるべきだろうか、それとも別の種族のなかに入れるべきだろうか」

「けっして別の種族のものではありません」と彼は言った、「われわれがそれによって思いなす能力を持つところのもの、それがすなわち、まさに＜思いなし＞にほかならないのですから」

無論、ここでいう「能力」は、477c1-2 の以下の規定を満たすものであって、能力の実現という意味で解することはできない。

「われわれはいろいろの＜能力＞というものを一つにまとめて考えて、存在するものの一種族としてとらえ、これを、『われわれや他のすべてのものをして、それぞれがなしうところのことを、なしうようにさせる力』(αἷς δὴ καὶ ἡμεῖς δυνάμεθα ἃ δυνάμεθα καὶ ἄλλο πᾶν ὅτι περ ἂν δύνηται) であると言うことにしよう」

従って、【T4】を見る限り、言わば可知界の光であるところの真理が、認識能力の実現にとって十分であるという点は確認できない。

以上の理由から、光や真理が、視覚や知的認識能力が実現するために十分なはたらきをするということは、太陽の比喩からは読み取れない。だとすれ

ば、【T2】【T3】に見られるような②の能力を、Adam の解釈に従って①の実現と同一視する必要はなく、プラトンが「哲学用語不足」だという疑いも晴れるのではないだろうか。

おわりに

本稿を締めくくるに当たって、今後の展望を見据える上で、太陽・線分・洞窟の比喩の基本的理解に関わる、次の問題点を指摘しておきたい。

D. A. Rees が、Adam の注釈（第二版）に寄せた序文の中で主張したように⁹、プラトンが『国家』の太陽の比喩（および線分・洞窟の比喩）において伝えようとしている考えそのものは、まだ彼自身にとっても明確でなかった可能性がある。話し手ソクラテスは、＜善＞が何であるかということについては、自分に思われることにいま到達するだけでも身に余るので措くとした上で（506e1-3）、代わりに＜善＞の「子供」であり「最もよく似ている」ようにみえるもの（つまり太陽）について語ることを提案する（e3-5）。しかし彼は、それを語るにあたっても「故意にではないにせよ、ひょっとして君たちをだますことのないように用心してくれたまえ」（507a4-5）と注意し、後には、自分が思うことを語っているのはグラウコンに強いられたからだと仄めかす（509c3-4）。本稿の冒頭で指摘したように、太陽の比喩で提示される構想が必ずしも具体的に提示されていないのは、そもそも構想として固まり切れていなかったからかもしれない。

しかしソクラテスのこうした態度は、＜善＞とは何かという問題自体が極めて大きいゆえの慎重さ、あるいは一種の空とぼけに由来するという見方もできる¹⁰。プラトンとソクラテスが、太陽・線分・洞窟の比喩で何をどこまで語ろうとし、どこまで語ることができたのか——その答えを、三つの比喩を通して読む中で探っていくことが、今後の課題の一つであると思われる。

（京都大学・博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC）

文献

Adam, J., 1963, *The Republic of Plato*, 2nd ed. with an Introduction by D. A. Rees, Cambridge.

⁹ Adam, Vol. 1, xxiii.

¹⁰ Cf. Adam, Vol. 2, 54.

Ferguson, A. S., 1921, "Plato's Simile of Light", *The Classical Quarterly* 15: 131-152.

藤沢令夫訳, 1976, 『国家』, 岩波書店.

朴一功, 1983, 「「太陽」「線分」「洞窟」の比喩再考」, 『古代哲学研究』第 15 号, 22-34.

付記 本稿は「平成25年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果」の一部である。